ヴェーダ文献における誕生の神話と儀礼
——後産分娩を中心として——

西村直子

0. はじめに

古代インドの医療では，元来多くの部分に呪術が関与していた。アタルヴァヴェーダ（Atharvaveda［AV］，B.C.1000頃）には，骨折治療や止血，解毒などの治療を目的とした呪法に用いる歌が多く収められている[1]。当時の医療行為の実態は詳らかではないが，医療と呪術とが本来不可分のものであったことは明らかである。

それらの呪法には，妊娠，出産，不妊治療等を扱うものも含まれている。ヴェーダ文献を伝えたインド・アーリヤの人々は遊牧移住生活を営み，定住化の過程においても牛を基本財産としていた。彼らによる産科医療への言及は，人間を対象とする場面だけでなく，家畜の繁殖をも視野に入れていたものと推測される[2]。人間や家畜の妊娠・出産を彼らがどのように観察し，理解していたかを探ることによって，彼らの医学的（または畜産学的）観察の精密さと，子供の誕生に付与されていた社会的乃至宗教的意義の一端を明らかにすることもできよう。本稿は，ヴェーダ文献における子供の誕生にまつわる神話と儀礼の中から，後産分娩への言及を選んで精査し，当時の産科医療とその呪術的側面の解明への一助とすることを目的とする。

後産処理には新生児の健やかな成長の祈願が込められていたことが，世界各地の伝承及び風習から窺い知られる[3]。日本では後産を「胞衣（えな）」と呼び，後産を

---

* 一次文献の書誌情報及び略号については，cf. Toshifumi GOTŌ, Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen (Wien 1987), 15ff.

1 例えば，cf. IV 12（骨折治療），I 17（止血），VI 100（解毒）等。

2 古インド・アーリヤ語文献に現れる医学用語の中に，家畜の観察を基盤とする要素が見られることについては，cf. NISHIMURA “*úlba-* and *jarā́yu-*: Foetal appendage in Veda” (Journal of Indological Studies 23, 印刷中)。

3 例えば：木下忠『埋甕－古代の出産習俗』（雄山閣 1981），中村禎里『胞衣の生命』（海鳴

壺に入れて特定の場所に埋める，胞衣納めという儀礼が，遅くとも奈良時代以降，行われていたと推測される。後産を胎児の分身と見なし，その子の成長が後産の処理によって影響を受けると考えられていたことを示している。ロシアでは，赤ん坊はみな双子で生まれてくると考えられていたことが報告されている。胞衣は誕生した人間の一部であり，新生児はこの世に生きるべく，また胞衣はあの世に行くべく定められていると考えられていた[4]。これらはマールターンダ Mārtāṇḍa「死んだ卵から生まれたもの」という名の子供の流産にまつわる，人類と死の起源の神話[5]を想起させる。この神話は Ṛgveda，更にインドイラン共通時代に遡ると考えられる。Mārtāṇḍa は生きている部分と死んでいる部分とから成り，前者は人類の起源に，後者は死の起源となる。この死んだ部分について，後産が想定されていた可能性がある[6]。

社 1999)，栗原成郎「ロシア産育習俗考」(『創価大学外国語学科紀要』13, 2003, 23－45)，Lauren DUNDES Ed., The Manner Born: Birth Rites in Cross-Cultural Perspective, Walnut Creek － Lanham － New York － Oxford, 2003, Helaine SELIN Ed., Childbirth Across Cultures: Ideas and Practices of Pregnancy, Childbirth and the Postpartum, Dordrecht － Heidelberg － London － New York, 2009等参照。

4 栗原成郎「ロシア産育習俗考」(→ n.3) 参照。

5 後藤敏文「人類と死の起源－リグヴェーダ創造讃歌 X 72－」(『仏教文化学会十周年・北条賢三博士古稀記念論集』, 2004, 415–432)，Toshifumi GOTŌ, Glossar s.v. Mārtāṇḍa 837f. in: Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis (→ n.9)

6 Paippalāda-Saṁhitā XI 5,5は，Veda にも赤ん坊が双子で生まれてくるというロシアの民間伝承に通じる観念を辿り得ることを示唆しているかもしれない：*pūrvavatsena saha vatsinī gaur yo 'sya vatso aparo jarāyu tat* | *tṛtīyaṃ māṁsaṃ parinirmitaṃ yat* | *tasmād devā adhijarāyum āhuḥ.* ‖「先の仔牛と共に，雌牛は仔牛を持つ者となる。この雌［牛］の後の仔牛であるもの，それが胞衣である。第3の肉として丸く形作られたもの，それに基づいて，神々は［その雌牛を］『優れた胞衣を持つ雌牛 (adhijarāyu)』と呼ぶ」。後産が「後の仔牛」即ち，後から分娩される仔牛に見立てられている。*adhijarāyu-* は，TUCKER が指摘しているとおり「優れた胞衣を持つ雌牛」を謂う語であると考えられる (“PS 11.5: the *dákṣiṇā*-cow, the *adhijarā́yu-*, and the linguistic history of the Vedic word *jarā́yu-*,” 14th World Sanskrit Conference [Kyoto 2009] ハンドアウト)。この語は祭官への報酬となる雌牛を頌える PS XI 5にのみ現れる。*adhijarāyu-* という複合語は「優れた胞衣を持つ」の意で Bahuvrīhi の女性形であろう。更なる可能性として，「胞衣の上にある／胞衣に加わっている優れた［肉 (*māṁsa-*)］を持つ雌牛」という解釈が挙げられる。即ち，無形無心体 (acardius amorphus) 等の，分離双胎奇形という胎子の奇形を謂うものかも知れない。分離双胎奇形は正常子と無心体から成り，後者は不完全な固体であるか，体形が認められない。特に，無形無心体は卵のような球形であり，胎盤に付着している。Cf. 山内／大地他『最新家畜臨床繁殖学』277f. (→ n.21)，HISHINUMA, TAKAHASHI, and KANAGAWA,

インド医学(アーユルヴェーダ Āyurveda)の基本資料であるチャラカ・サンヒター Caraka-Saṁhitā 及びスシュルタ・サンヒター Suśruta-Saṁhitā の成立は，B.C. 2世紀頃より以前には遡り得ないとされている[7]。これらに先立つヴェーダ文献には，医療や薬学への言及を（断片的にではあるが）見出すことができる。また，先述のような疾病治癒を目的とした儀礼，呪法も伝えられている。本稿は，それらの理解に基づき，医学文献成立以前の医療の在り方と「伝統医学」の史的展開の解明に向けて，一つの資料を提供する。

1. 安産の祈願

1.1. 後産（ジャラーユ *jarāyu-*）の速やかな娩出を祈願する mantra

リグヴェーダ R̥gveda [RV]（B.C. 1200年頃編集固定）の第5巻第78讃歌は，アシュヴィン Aśvin とナーサティヤ Nāsatya 両神（Aśvin 双神）に捧げられている。全9詩節中，始めの4詩節は Aśvin 双神を招く内容となっており，これに続く2詩節は Aśvin たちが詩人（R̥ṣi）サプタヴァドゥリ Saptavadhri を救出した勲功を讃えている。これらの中に，出産時の陣痛を示唆する表現が見られる（第4－6詩節）。後の3詩節は胎児に速やかに出てくるよう呼びかけており，当該讃歌が出産の場面を何らかの形で想定した，安産祈願を主眼としたものであることを示している。Aśvin 双神は神々の医師として位置づけられることがあり[8]，この場面でも彼らのそのような性格を跡づけることができる。第8詩節に後産（*jarā́yu-*）への言及が見られる。

第1－3詩節末尾の *sutā́n*「搾られた［ソーマ Soma］たち」の解釈を巡っては，検討の余地がある。Soma は麻黄に比定され[9]，その圧搾液は Soma 祭の主要献

"Histological and Cytogenetical Observations on a Bovine Acardius Amorphus" (Japanese Journal of Veterinary Science, 49-1, 1987, 195－197). 更に，*apara-* については，後の家庭祭式文献や医学文献に *jarāyu-* の同義語として現れる *aparā-/avarā-* との関連を検討すべきであろう。

7　Cf. MEULENBELD, A History of Indian Medical Literature, IA (Groningen 1999). Caraka については105ff., Suśruta については350ff. 参照。

8　例えば RV VII 18, 8 *utá tyā́ dáivyā bhiṣájā ' śáṃ naḥ karato aśvínā | yuyuyā́tām itó rápo ' ápa srídhaḥ* ‖「また，そういう天に属する二人の医師として，Aśvin たち二人は我々をめでたく作るように。彼ら二人は，ここで，欠陥を，失敗たちを，防いでほしい」。Cf. Hermann OLDENBERG, Religion des Veda[2] (Stuttgart, Berlin 1923), 214f., Alfred HILLEBRANDT, Vedische Mythologie 1. Band (Hildesheim 1965), 55f.

供物として用いられる。安産を祈願する当讃歌がSomaと結び付けられている理由は明らかではない。① 出産に際してSomaが実際に用いられたのか，② 現実のSoma祭に出産を比喩的に扱う議論があったのか，或いは ③ 現実の出産にSomaが何らかの象徴的な役割を果たしたのかの可能性が想定される。①については，現段階で可能性の有無を検討しうる条件はほとんど整備されていないのが現状である。RVにおける出産儀礼的な要素を解明する過程で初めて妥当性の検討が可能となろう。②に関して想起されるのは，Soma祭における祭主の潔斎（ディークシャー Dīkṣā）である。ヤジュルヴェーダ学派の各ブラーフマナ（brāhmaṇa，B.C. 800頃以降）では，潔斎中の祭主を胎児，または再生の過程にある「中間的存在」とみなし，終了儀礼の沐浴（アヴァブリタ Avabhṛtha）を経てこの世に再生するものとする議論がある[10]。このような「祭主の再生」という主題を，当該讃歌の背後に見出すことも可能かもしれない。③は，月を仲立ちとしてSomaと祖霊の再生とを関連付ける観念が存在した可能性を推測させる。即ち，RVにはSomaを天体の月と同一視する観念が見られる[11]。一方，後のBrāhmaṇa文献には，月を祭主が死後に祖霊となって赴く世界と位置付ける議論があり，二道説の基盤となっている[12]。更に，祖霊は輪廻の主体として胎児発生の際に不可欠な要因となる。以上のことから，出産の場面における「搾られたSomaたち」は，Somaたる月から地上に降りてきた祖霊たちの比喩であり，それが地上における子供の誕生と密接に結びついているという観念が，RVの当該讃歌の背景に存在した可能性も否定できない。

9 Cf. John Brough, "Soma and *Amanita Muscaria*," Bulletin of the School of Oriental and African Studies [BSOAS] 34-2 (1972), 331 – 362 (= Collected Papers 366 – 397), Harry Falk, "Soma I and II," BSOAS 52-1 (1989), 77 – 90, Witzel – Gotō, Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis. Aus den vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael Witzel und Toshifumi Gotō unter Mitarbeit von Eijirō Dōyama und Mislav Ježić (2007), Glossar s.v. Soma (p.846).

10 Cf. 大島智靖「*dīkṣaṇīyeṣṭi*と祭主の『犠牲』」，印度学仏教学研究55-1 (2006)，313 – 310，西村「Veda文献における胎児の発生と輪廻説」，『論集』36 (2009 [2010])，69 – 93.

11 この観念は，RVの新層にまで遡ることができる。Cf. Oldenberg op.cit. 175f.

12 Cf. Junko Sakamoto-Goto, "Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka," Akten des 27. Dutschen Orientalistentages (Bonn, 28. September bis 2. Oktober 1998), Norm und Abweichung (2001), 157 – 167.

RV V 78

1 *áśvināv éhá gachataṃ ǀ nā́satyā mā́ ví venatam ǀ*
haṁsā́v iva patatam ā́ sutā́ṁ úpa ǁ
2 *áśvinā hariṇā́v iva ǀ gaurā́v ivā́nu yávasam ǀ*
haṁsā́v iva patatam ā́ sutā́ṁ úpa ǁ
3 *áśvinā vājinīvasū ǀ juṣéthāṃ yajñám iṣṭáye ǀ*
haṁsā́v iva patatam ā́ sutā́ṁ úpa ǁ
4 *átrir yád vām avaróhann ṛbī́sam ǀ ájohavīn nā́dhamāneva yóṣā ǀ*
śyenásya cij jávasā nū́tanen$_a$- ǀ ā́gachatam aśvinā śáṃtamena ǁ
5 *ví jihīṣva vanaspate ǀ yóniḥ sū́ṣyantyā*[13] *iva ǀ*
śrutám me aśvinā hávaṃ ǀ saptávadhriṃ ca muñcatam ǁ
6 *bhītā́ya nā́dhamānāya ǀ ṛ́ṣaye saptávadhraye ǀ*
māyā́bhir aśvinā yuvám ǀ vṛkṣáṃ sáṃ ca ví cācathaḥ ǁ
7[14] *yáthā vā́taḥ puṣkaríṇīṃ ǀ samiṅgáyati sarvátaḥ ǀ*
evā́ te gárbha ejatu ǀ niráitu dáśamāsyaḥ. ǁ
8[15] *yáthā vā́to yáthā vánaṃ ǀ yáthā samudrá éjati ǀ*
evā́ tváṃ daśamāsya ǀ sahā́vehi jarā́yuṇā ǁ
9 *dáśa mā́sāñ chaśayānā́ḥ ǀ kumāró àdhi mātári ǀ*
niráitu jīvó ákṣato ǀ jīvó jī́vantyā ádhi. ǁ

---

13 *sav^i/sū*「(母が子を) 産む」の未来分詞に由来する形容詞であると考えられる。正規形と異なる点が2つある。語根が弱形を取っていることと，アクセントの位置とである。通例の未来形には *soṣyántī-* または *saviṣyantī-* が求められる。*sū́ṣyantī-* は BĀU 及び諸 GṛSū に見られるが，派生語も含めて *sav^i/sū* の活用形の殆どに弱形が取られていることを考慮すると，RV の示す形に対して，一般規則に従う BĀU などの形は二次的に作られたものであると考えられる。Cf. Toshifumi GOTŌ, “Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen” (『国立民族学博物館研究報告』16-3: 681 – 707, 1992), 698ff. 及び n.144.

14 当該詩節と類似する mantra が，ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad VI 4, 23に伝えられている。→ 2.1.

15 当該詩節と類似する mantra が，白ヤジュルヴェーダ学派に伝えられている：ヴァージャサネーイ・サンヒター Vājasaneyi-Saṁhitā VIII 28 (シャタパタ・ブラーフマナ Śatapatha-Brāhmaṇa IV 5,2,4) ~ VS-Kāṅva IX 5,1 (ŚBK V 6,4,1): *éjatu dáśamāsyo ǀ gárbho jarā́yuṇā sahá ǀ yáthāyáṃ vāyúr éjati ǀ yáthā samudrá éjati ǀ evā̀yáṃ dáśamāsyo ǀ ásraj jarā́yuṇā sahá ǁ*「10ヶ月を経た者は動け，胎児は jarāyu と共に。恰もこの風が動くように，恰も海が動くように，そのように，この10ヶ月を経た者は (たった今) 外れ落ちた，jarāyu と共に」。

1　両 Aśvin よ，こちらへ来い，ここに。両 Nāsatya よ，あちこち探るのをやめよ。2羽の雁がのように飛べ，こちらへ，搾られた [Soma] 達のもとへ。

2　両 Aśvin よ，2頭の Hari 達がのように，牧草地を求め2頭の Gaura 達がのように，2羽の雁がのように飛べ，こちらへ，搾られた [Soma] 達のもとへ。

3　駿馬を財とする両 Aśvin よ。君達は祭式を享受せよ，望みのために。
2羽の雁がのように君達は飛べ，こちらへ，搾られた [Soma] 達のもとへ。

4　Atri が，君達二人を，灼熱の炉に降りつつ，何度も呼んでいたとき[16]，－困窮している若い女がのように－[あのときの早さ，]
鷹さえも有する今新たな素早さによって，君達は来い，両 Aśvin たちよ，最もめでたい幸ある [素早さ] によって。

5　君は開け，樹木よ，分娩しようとしている[13] [女] の子宮がのように。
私の呼びかけを聴け，両 Aśvin よ。そして，Saptavadhri を解き放て。

6　恐れ，困窮している，Ṛṣi である Saptavadhri のために，
諸々の不可思議な力（計算能力）によって，両 Aśvin よ，君達二人は，木を曲げては閉じ，そして広げる。

ソーマ祭の基本形である Agniṣṭoma 祭では，終了儀礼の中でヴァシャー *vaśā-* の犠牲祭を行う。vaśā は不妊牛，又は妊娠していない牛と一般に解されるが，厳密には「妊娠期間中にない（ことが予想される）雌牛」を意味するものと判断される（後藤敏文「*prathamám*『たった今』」，奥田聖應先生記念論集，印刷中）。vaśā を屠殺して開腹した時に，胎児の有無が吟味される。胎児がいた場合はこれを取り出して贖罪儀礼（プラーヤシュチッティ prāyaścitti）を行う。当該 mantra は，その際に唱えられる。RV では胎児に「母体から下りよ（*ávehi*）」と命じているのに対し，VS は「動け（*ejatu*）」と呼びかけている。母牛は既に絶命しているため，通常の分娩を行うことができない。RV の詩節が元来の意図（安産祈願）とは全く異なる文脈で祭式において用いられている点は，祭式文献における mantra 伝承の展開を考える際に留意する必要がある。

16　アトリ Atri は RV 以来の伝説的詩人である。その誕生（流産）は神話的要素に富み，様々な文献に言及される。当該箇所においても，彼の神話的誕生説話が含意されているものと思われる。Cf. Stephanie W. JAMISON, The Ravenous Hyenas and the Wounded Sun (Ithaca and London 1991), 212ff. なお，MACDONELL － KEITH, Vedic Index (London 1912 [reprint: Delhi 2007]) s.v. Saptavadhri は，GELDNER による RV 訳の Index (Der Rig-Veda: aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen, Teil 4. Namen- und Sachregister zur Übersetzung dazu Nachträge und Verbesserungen aus dem Nachlass des Übersetzers, herausgegeben, geordnet und ergänzt von Johannes Nobel, Cambridge 1957) に基づいて，Saptavadhri を Atri と同一人物とみなしている。

7 風が蓮池をいたるところで一斉に波立たせるように
同様に，君の胎児は動け。[母胎から] 出てこい，10ヶ月を経た者として。
8 あたかも風が，あたかも森が，あたかも海が揺れるように
同様に，君は，10ヶ月を経た者よ，下りて行け，胞衣とともに。(→ n. 15)
9 10ヶ月間母の中に横たわり終えて，子息は，出て来い，命ある [君] は，損なわれていない，命ある [君]は，生きている [母]から。

1.2. 後産分娩と安産

古インドアーリヤ語の *jarā́yu-* (→ 前節，第8詩節) は，諸卵膜[17]・胎盤・臍帯などを包括的に謂う「胎児付属物」または後産，「胞衣(えな)」に相当する語である[18]。胎児付属物は，新生児の分娩後に娩出される (後産分娩)。この娩出が遅れると，母体に深刻な障害が惹き起こされることがある (後述)。AV には，胞衣に「出て来い」と呼びかける歌もある：

AV I 11,4 − 6 (~AV-Paippalāda I 5)

4 *néva māṃsé ná pī́basi* | *néva majjásv ā́hatam* |
ávaitu pṛ́śni śévalaṃ | *śúne jarā́yv attavé* | *'va jarā́yu padyatām.* ||4||
5 *ví te bhinadmi méhanaṃ* | *ví yóniṃ ví gavī́nike* |
ví mātáraṃ ca putráṃ ca | *ví kumāráṃ jarā́yuṇā́-* | *$_{a}$va jarā́yu padyatām* ||5||
6 *yáthā vā́to yáthā máno* | *yáthā pátanti pakṣíṇaḥ* |
evā́ tváṃ daśamāsya | *sākáṃ jarā́yuṇā patā́-* | *$_{a}$va jarā́yu padyatām.* ||6||
4 肉の脇にはないようだ，脂肪の脇にはない，髄達の脇にはないようだ，損なわれた [胞衣]は。
斑点のある，粘液質 (粘膜？[19]) の君 (胞衣) は出て行け。犬が胞衣を食べる

---

17 卵膜 (または胎膜) は3層からなる：人間の場合は外側から脱落膜，絨毛膜，羊膜；草食動物の場合は絨毛膜，尿膜，羊膜である。牛などの反芻動物は脱落膜を形成しない。大地隆温 他 著／山内亮 監修『最新家畜臨床繁殖学』(1998 朝倉書店)，加藤嘉太郎，山内昭二『新編家畜発生学』(養賢堂2005) p.154参照。また，人間では初期に退化し観察されにくい尿膜が発達する，cf. 安田峯生訳『ラングマン人体発生学』第9版 (メディカル・サイエンス・インターナショナル，2008) p.63.

18 Cf. NISHIMURA "*úlba-* and *jarā́yu-*" (→ n.2).

19 *śay*/*śī* から作られた形容詞「横たわっている，留まっている」か。Jayarāma によるパーラ

為に。胞衣は脱落せよ。

5 私は君の男根を分け開く，子宮を分け［る］，両ももの付け根を分け［る］，母と息子とを分け［る］，男児を胞衣から分け［る］。胞衣は脱落せよ。

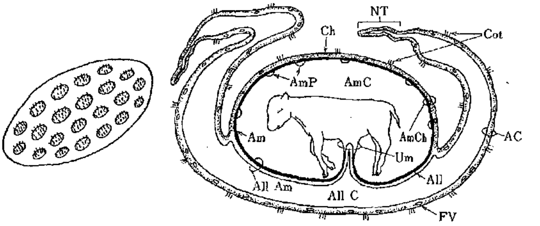
6 恰も風が，恰も思考が，恰も鳥たちが飛ぶように，
そのように，君は，10ヶ月を経て，胞衣と共に飛べ（落ちろ）。胞衣は脱落せよ。

第4詩節における「斑点のある，粘液質の胞衣」は，ウシ等の反芻類の胎児付属物の描写であると考えられる。反芻類の胎盤は絨毛膜上に飛び石状に形成され（絨毛叢），それが斑点のように見える（→ 図1）。また，「犬が胞衣を食べる」という一節は，後のジャイミニーヤ・ブラーフマナ Jaiminīya-Brāhmaṇa［JB］（B.C. 7C 頃）における Saramā と Paṇi の神話を想起させる[20]。当該詩節では家畜の出産を想定しているように見受けられるものの，讃歌全体としては人間の出産を主題としているものと思われる。

スカラ・グリヒャスートラ Pāraskara-Gr̥hyasūtra［PārGr̥Sū］I 16への注釈では *śevala-* は *picchalaṃ jalopacitaṃ vā*「粘液質の，或いは水っぽい」。Cf. Kuiper, Aryans in the Rigveda, Amsterdam － Atlanta 1991. 43 － 44.

20 II 441 *sā hānāśuṣy uvāsa. sā ha jarāyv apāstaṃ viveda. tad dha cakhāda. tāṃ haika upajagau: tyam iva vai ghnatī saramā jāru khādatīti. tad idam apy etarhi nivacanaṃ. tyam iva vai ghnatī saramā jāru khādatīti. jarāyu ha sā tac cakhāda. sā ha punar āsasāra. tāṃ hocus: sarame. 'vido gā3 iti.*「彼女（Saramā）は［何も］食べぬまま一夜を過ごした。すると［彼女は］胞衣が投げ捨てられていたのを見いだした。それを［彼女は］噛ん［で食べた］。彼女に対して或る人々は歌いかけた：『例の者を殺しているかのように，Saramā は胞衣（*jāru*）を噛むのだ』と。それが現在でもこの［ような］場合においてことわざ［として用いられる］：『例の者を殺しているかのように，Saramā は胞衣を噛むのだ』と。胞衣を彼女は，その際，噛んだ。彼女は再び［神々の下へ］走り戻った。彼女に［神々は］言った：『Saramā よ，牛達を君は見いだしたか』と」。Cf. Oldenberg, Noten II 329; Oertel, Kl.Schr. 65ff.; Hoffmann, Aufs. 397; Murakawa, Das Gavāmayana-Kapitel im JB, Dissertation, Berlin 2007, p.118.

図1　反芻動物の胎盤（卵膜 + 絨毛叢）（左）およびウシの胎子と胎膜の模式図（右）[21]



AC: 尿膜絨毛膜, All: 尿膜, AllAm: 尿膜羊膜, AllC: 尿膜腔, Am: 羊膜, AmC: 羊膜腔, AmCh: 羊膜絨毛膜, AmP: 羊膜斑, Ch: 絨毛膜, Cot: 絨毛叢, FV: 胎子側血管, NT: 末端壊死部, Um: 臍帯。

後産分娩が速やかに成されない状態は，分娩異常の一種とみなされる（後産停滞[22]）。人間の場合にも家畜の場合にも，母体を危険に晒すことに変わりはない。新生児の分娩と同時に後産の排出を促そうとするRVやAVの歌は，後産の分娩と母体の安全との関係を当時の人々が知識として持っていたことを明確に示している。それと同時に，現代では専ら産科医療の場で扱われる事柄が，呪法の対象として位置づけられていたことが理解される。

2.　出産儀礼における後産分娩

2.1.　ウパニシャッドにおける言及

一般に「ヴェーダ祭式」という場合，新月祭・満月祭やSoma祭など，シュラウタŚrauta祭式と呼ばれる祭式カテゴリーを指すことが多い。これは，部族繁栄と宇宙秩序の維持とを主眼としたものである。一方，部族長個人のライフステージに沿って行われる祭式群も組織化され，伝承されている。グリヒヤGr̥hya祭式，家庭祭式と呼ばれるカテゴリーである。本稿で扱う出産儀礼は，この家庭祭式に含まれている。Veda祭式はŚrauta祭式から順次整備され，Gr̥hya祭式は遅れて整備された。グリヒヤスートラGr̥hyasūtra［Gr̥Sū］と呼ばれる文献は，Veda文献の中では新層に位置していると考えられる（紀元前5－4世紀頃を中心か）。

21　大地隆温 他 著／山内亮 監修『最新家畜臨床繁殖学』(1998 朝倉書店), 154。Nishimura "*úlba-* and *jarā́yu-*" (→ n.2)に掲載した図を和文表記に替えて再掲。

22　または，胎盤停滞とも言う。「胎盤」は，厳密には絨毛膜と脱落膜との間に形成される絨毛叢などを総称する，特定の器官を指す語である。しかし，一般には「後産」と同義で用いられることも多い。

ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad［BĀU］はGṛSū に先立つ紀元前6世紀の成立と見られ，第6巻には妊娠出産等を祭式的行為になぞらえ（または祭式の一部とみなして），論じる一節を含んでいる。そこに見られる誕生儀礼への言及も，Gṛhya 祭が定式化される以前の姿を伝えるものと推測される。以下に，出産直前の場面 VI 4, 23[23] を示す。ここでは，mantra を唱えながら妊産婦に水を掛けることが示されている。地の文はイタリックで，mantra はローマンで示す。アクセントはマーディヤンディナ派の伝承に依る：

BĀU VI 4,23（= Śatapatha-Brāhmaṇa（M）XIV 9,4,22）*soṣyántīm adbhír abhyùkṣati.* | yáthā[24] vātáḥ puṣkaríṇīṁ ˡ samiṅgáyati sarvátaḥ | evā́ te gárbha ejatu ˡ sahā́vaitu jarā́yuṇā（cf. 1.1. RV V 78,7）‖ índrasyāyáṃ vrajáḥ[25] kṛtáḥ | sā́rgaḍaḥ[26] sápariśrayaḥ ˡ tám indra nírjahi ˡ garbhéṇa ⁺sā́varaṁ[27] sah$_{\acute{a}}$-*éti.* ‖23‖　生むことになりつつある女（分娩中の女，→ n.13）に水たちをかける，「風が蓮池をすべて［の方向］から一斉に波立たせるように，同様に，君の胎児は動け。［母胎から］出てこい，後産と共に」「この Indra の囲い場所（*vraja*）は，門のある，十分に取り囲まれた（守られた）ものと成された。その［囲い場所］を[28]，Indra よ，*avarā̆*（後産）を伴って[28]，胎児と共に君は叩き出せ（パラレルなし）」と［唱えながら］。

当該箇所では2つの mantra を唱えることが示されている。先行する mantra は RV V 78,7に類似する内容を含み，後続の mantra は他所に平行句を持たない孤

23　後続の第24節では，新生児が誕生した後の儀礼に主題が移っている：祭火の準備（cf. n.31），供物となる乳製品（プリシャッダージヤ *pṛṣadājya-*: バターオイルと酸乳 dadhi との混合物）の調製など。BÖHTLINGK（Bṛhadāraṇgakopanishad in der Mâdhjaṁdina-Recension, St.Petersburg, 1889）は VI 4,23 の mantra 及び24の全文の訳を省略している。

24　BĀU: *vāyuḥ*. ŚB 各校訂本は RV V 78,7 と同じ *vātaḥ* を伝えている。→次注。

25　BĀU の諸校訂本（BÖHTLINGK, 18 Upaniṣad, OLIVELLE）及び ŚB WEBER ed. に基づく。BĀU Ānanda-Āśrama 版及び ŚB Kalyan-Bombay 版には *vajraḥ* とある。

26　BĀU: *sārgalaḥ*.

27　BĀU: *sāvarāṃ*. Ved.Conc. は ŚB の読みを採用し，BĀU の異読を挙げていない。

28　または，「その *avarā̆*（後産）を伴った者（masc. sg.）を」の形容詞で男性名詞の *rakṣas-* を謂うものか。RV 以来，懐胎時や妊娠中に胎児及び母胎に害を為す存在を退けて母体の健康を含めた安産祈願の観念が確認される。例えば RV X 162 など。Cf. 西村「Veda 文献における胎児の発生と輪廻説」（→ n.10）.

立例である。何れも後産 (*jarā̆yu-*, *avarā̆-*) に言及するが，祭式行為としての後産処理には全く触れられていない。

2.2. 家庭祭式文献 (Gṛhyasūtra) に伝えられる出産と後産に関する儀礼[29]

家庭祭式は，家長が男児を得ることを一つの眼目としている。先述の BĀU が生殖行為に儀礼的意義を与えている点は，男児獲得を目指すものとして理解される。生殖行為から新生児誕生に至る一連の過程は，プンサヴァナ *puṁsavana* (「男子産み」)，ジャータカルマン *jātakarman* (新生児のための儀礼)，スィーマンタ・ウンナヤナ *sīmantonnayana* (「畝引き」: 頭髪の分け目を赤く色づける[30])，スーティカーアグニ *sūtikāgni* (産褥の火[31]) 等に整備され，安産と速やかな後産分娩とを祈願する儀礼はクシプランスヴァナ *kṣipraṃsuvana* (**2.2.2.** ĀpGṛSū, **2.2.3.** BhārGṛSū) またはクシプラプラサヴァナ *kṣipraprasavana* (**2.2.4.** HirGṛSū) (「速やかな分娩」)，ソーシュヤンティーホーマ *soṣyantīhoma* (「産婦のための献供」即ち分娩直前の献供: **2.2.5.** GobhGṛSū, DrāhyGṛSū, KhādGṛSū)，アヴァラー・アヴァパタナ *avarā*[32]*-avapatana* (「後産落とし」: **2.2.1.** PārGṛSū) として組み込まれる。

2.2.1. 誕生儀礼は各 Veda 学派に伝えられるが，後産分娩への言及は Yajurveda [YV] 学派にのみ伝えられている。先述の BĀU と同じ白 YV 学派に属するパーラスカラ・グリヒャスートラは，mantra を唱えながら産婦に水を掛

29 Cf. Hillebrandt, Ritual Literature 41ff., Oldenberg, Religion des Veda 338ff., Speyer, Ceremonia apud Indos, quae vocatur jātakarma, Hazenberg 1872.

30 Cf. Gonda, "Sīmantonnayana as described in the Gṛhyasūtras," East and West 7 (1956), 12 − 31 (= Selected Papers I, 186 − 205).

31 概要については，cf. Hillebrandt op.cit. 44f. パーリの Jātaka 144 Naṅguṭṭhajātaka (Ja I 493 − 495) 及び 162 Susīmajātaka (II 45 − 50) に見られる *jātaggi-* が想起される。いずれの前生譚も，子供の生まれた日に両親が *jātaggi* を設置するエピソードを含んでいる。子供は，16年後にその火を伴って荒野 (*arañña-*) で苦行生活を始めるが，その火を崇拝することが無益であると知り，火を捨ててしまう。*jātaggi-* という複合語は Skt. **jāta-agni-* 「新生児の為の祭火」に遡るものと思われるが，Cone, A Dictionary of Pāli s.v. *jāti* は *jāti-* + *agni-* の複合語という解釈を第一に示し (「誕生の火」)，*jāta-*° の可能性は副次的示唆に留めている。

32 Rahur Peter Das, The Origin of the Life of a Human Being (Delhi 2003), 517f. (*aparā-*).

けることを規定している：

Pāraskara-GṛSū I 16,1−2 *soṣyantīm adbhir abhyukṣati.* | ejatu daśamāsya[33] (VS VIII 28 Pratīka) *iti. prāg* yasyai ta[34] (VS VIII 29 Pratīka) *iti.* |1| *athāvarāvapatanam* | avaitu pṛśni śevalaṁ | śune jarāyv attave | naiva māṁse na pīvari[35] | na kasmiṁś canāyatam | ava jarāyu padyatām[36] *iti.* |2| 1. 生むことになりつつある［妊婦］に水たちをかける，「10ヶ月を経た者は動け[33]」と［唱えながら］，前（または東側）に「その［女］のために君の[34]」と［唱えながら］。2. 次に，「後産落とし（avarāvapatana）」が［行われる］。「斑点のある，粘液質の［胞衣］は出て来い，犬が胞衣を食べるために。肉の脇にはない，脂肪の脇にもない，どこにも広がってはいない。胞衣は脱落せよ[36]」と［唱える］。

2.2.2.−4, 一方，白 YV よりも保守的性格が強いとされる黒 YV 学派の諸 GṛSū は，儀礼の所作をより詳しく伝えている。また，PārGṛSū とは異なる mantra が用いられる。分娩時の儀礼について伝えるのは，黒 YV 学派の中でもタイッティリーヤ派のみである。

2.2.2. アーパスタンバ・グリヒャスートラ Āpastamba-GṛSū VI 14,13−15は，水の汲み方，道具，産婦の頭部に触れること，植物の使用について具体的に定めている：

kṣipraṁsuvanam. ||13|| *anāprītena śarāveṇānusrotasam udakam āhṛtya pattas tūryantīṃ nidhāya mūrdhañ choṣyantīm uttareṇa yajuṣābhimṛśyaitābhir adbhir*

---

33 mantra の全文については n.15参照。パラレルは：ŚB IV 5,2,4［Agniṣṭoma, 終了儀礼, Vaśā 牛解体］~ ŚBK V 6,4,1; KātyŚrSū XXV 10,5. Vaśā 献供については，cf. n.15.

34 VS VIII 29 *yásyai te yajñíyo gárbho* | *yásyai yónir hiraṇyáyī* | *áṅgāniy áhrutā yásya* | *tám mātrā́ sámajīgamaṁ svā́hā* ||「その［母］のために君の胎児が祭式にふさわしいものであるような，その［母］のために子宮が黄金を具えているような，その人（胎児）の手足達が外れない，そういう［胎児］を私は母と合体させた。svāhā」~ ŚB IV 5,2,10［Agniṣṭoma, 終了儀礼, Vaśā 牛の献供］~VSK IX 5,2（*yasyās*）（~ŚBK V 6,4,3）; Pratīka: *yasyai te* KātyŚrSū XXV 10,9.

35 *pī́vas-, pī́van-, pīvar-* については cf. AiG II-2 226, EWAia s.v. *pī́vas-* 及び *pī́van-*. *pīvarī-* RV+.

36 パラレルなし。Cf. AV I 11,4（**1.2.**）; *niraitu pṛśni śevalam* ĀpMantrBr II 11,20a（ĀpGṛSū VI 14,15 → 本文）.

uttarābhir avokṣet. ||14|| *yadi jarāyu na pated evaṃvihitābhir evādbhir uttarābhyām avokṣet* ||15|| 13.「速やかに分娩すること (Kṣipraṁsuvana)」が［行われる］。14. まだ満たされたことのない śarāva 盆を用いて，流れに沿う方向に水を汲んで，足のところに Tūryantī 草を据え置き，頭のところで分娩者に後続の祭詞[37]を伴って（唱えながら）触り，後続の諸［祭詞[38]］を伴ってこれらの水達をかけるべきである。15. もし胞衣が落ちなければ，まさしく同様に定められた［方法で用意された］水達（14. 参照）を，後続の両［祭詞[39]］を伴ってかけるべきである。

2.2.3. バーラッドヴァージャ・グリヒャスートラ Bhāradvāja-GṛSū I 22:22,12－23,3は，前述の ĀpGṛSū が直接引用していない mantra を明示している：

atha kṣipraṃsuvanaṃ. yajñopavītaṃ [13] *kṛtvāpa ācamyānāprītena śarāveṇānu-srotasam udakam āhṛtya* [14] *pattas tūryantīṃ nidhāya mūrdhañ choṣyantīm abhi-mṛśati* daśabhi- [15] s tvāṅgulibhir abhimṛśāmi daśamāsyāya sūtavā[38] *ity. athainā-* [16] *m adbhir avokṣati* yathaiva vātaḥ pavate yathā samudra ejati. | [23, 1] evaṃ kumāra ejatu saha jarāyuṇāvapadyatām *ity. atha yady aparā* [2] *na patet pāṇinodakam ādāya mūrdhany enām avasiñcet* tilade [3] 'vapadyasva na māṃsam asi no dalam avapadyasvāsāv[39] *iti.* 次に，「速やかな分娩」が［行われる］。［聖紐を］祭式掛けにして（左肩に斜め掛け）口を漱ぎ，まだ満たされたことのない śarāva 盆を用いて，流れに沿う方向で水を汲んで，足のところに Tūryantī 草を据え置き，頭

37 Āpastamba-Mantra-Brāhmaṇa II 11,14: *puṁsuvanám asi*「君は男子を産む者（その人の出産が男子によって特徴づけられる者）だ」。

38 ĀpMantrBr II 11,15－17: *ābhíṣṭvāhám̐ daśábhir abhí mṛśāmi daśamā́syāya sū́tave* ||15|| *yathàivá sómaḥ pávate yathā́ samudrá éjati* | *evā́ṃ te gárbha ejatu sahá jarā́yuṇā niṣkrámya práti tiṣṭhatv ā́yuṣi brahmavarcasí yáśasi vīryè 'nnā́dye.* ||16|| *dáśa mā́sāñ chaśayānó dhātrā́ hi táthā kṛtám* | *áitu gárbho ákṣito jīvó jī́vantyāḥ.* ||17||「15. これら10の［指］たちによって君に私は触る，10ヶ月を経た者を産む為に。 16. まさしく Soma が清まるように，海が揺れるように，同様に君の胎児は揺れよ，胞衣と共に歩み出て，安立せよ，寿命において，祭官の効力において，名声において，生命力において，食物において。 17. 10ヶ月の間横たわり終えた［胎児］は，即ち Dhātṛ によってそのように作られた［精液 retas ？］は，来い，損なわれていない，命ある胎児は，生きている［母］から」。Cf. BhārGṛSū I 22 (**2.2.3.**) ~ HirGṛSū II 3,1 (**2.2.4.**).

39 ĀpMantrBr II 11,18.19: *āyámanīr yamayata gárbham ā́po devīs sárasvatīḥ* | *áitu gárbho ákṣito jīvó jī́vantyāḥ.* ||18|| *tiladé 'va padyasva ná māṁsám asi nódalam* | *sthavitry áva padyasva ná māṁséṣu ná snā́vasu ná baddhám asi majjásu.* ||19||「18. こちらに伸びる［水］である君たち

のところで分娩者に触る,「十の指達を用いて私は君に触る, 10ヶ月を経た者を生む為に(n.38)」と[唱えながら]。次に, 当人(分娩者)に水たちをかける,「まさしく風が吹き浄まるように, 海が動くように, そのように, 男児は動け。胞衣と共に脱落せよ(n.38, cf. RV V 78,8.9. → **1.1.**)」と[唱えながら]。次に, もし後産が落ちなければ, 掌で水を汲み, 頭のところで当人(産婦)に注ぎかけるべきである,「Tiladā[40]よ, 君は脱落せよ。君は肉ではない。他方, 塊で[も]ない。君は出て来い, 某は(n.39)」と[唱えながら]。

2.2.4. ヒラニャケーシ・グリヒャスートラ Hiraṇyakeśi-GṛSū II 2,8－3,3では, 分娩後の儀礼の後で後産分娩に言及している：

vijananakāle kṣipraprasavanam | śirasta udakumbhaṃ nidhāya pattas tūryantīm athāsyā udaram abhimṛśati. |8| ||2|| yathaiva vāyuḥ pavate yathā samudra ejati | evaṃ te garbha ejatu saha jarāyuṇāvasarpatu || *ity avāṅ avamārṣṭi.* |1| *+jāte 'śmani+*[41] *paraśuṃ nidhāyopariṣṭād dhiraṇyaṃ teṣūttarādhareṣūpariṣṭāt kumāraṃ dhārayati.* | aśmā bhava paraśur bhava hiraṇyam astṛtaṃ bhava | vedo vai putranāmāsi jīva tvaṃ śaradaḥ śatam[42] || aṅgād-aṅgāt saṃbhavasi hṛdayād adhijāyase | ātmā vai putranāmāsi sa jīva śaradaḥ śatam || *iti.* |2| *yady aparā na pated añjalinodakam ādāya mūrdhānam asyāvasiñcet.* | +tilade 'va+[43] padyasva na māṃsam asi no dalam | avapadyasva svapathāt || *iti.* |3| II 2,8. 分娩の時に「速やかな分娩」が[行われる]。頭部の辺りに水の入った壺を据え置き, 足のところにTūryantī草を[置き], 次にこの女の腹部に触る。II 3,1.『恰も風が吹き浄まるように, 恰も海がこちらに

は胎児を手なづけよ, 天に属する, 湖を持つ水達は。来い, 損なわれていない, 命ある胎児は, 生きている[母]から。 19. Tiladāよ, 君は出て来い。君は肉ではない, 母胎(*údala-*)ではない。分厚い[後産aparā？]は脱落せよ。肉たちの間にはない, 腱たちの間にはない, 髄達の間には君は縛られていない」。*sthavitrī-*については, cf. Aryendra SHARMA, Beiträge zur Vedischen Lexikographie: Neue Wörter in M. Bloomfields Vedic Concerdance s.v. *tiladā́-* (PHMA 5/6, München 1959/1960) s.v. *sthavitrī-*, EWAia s.v. *sthūrá-*.

40 SHARMAは, WINTERNITZ (ĀpMantrBr Introd. p.XXIV u.)の, *tiladā-*を後産の人格化と見なす見解を挙げている, cf. PHMA (→ n.39) 5/6 s.v. *tiladā́-*.

41 Ed. KIRSTE: *jāteśmani.* ただし, Index の *aśman-* の項には当該箇所も挙げられている。

42 パラレルは：ŚB XIV 9,4,26; BĀU VI 4,26; KauṣBrUp II 11; ĀśCvGṛSū I 15,3; SāmaMantrBr I 5,18; MānGṛSū I 17,5; ĀpMantrBr II 12,1 (ĀpGṛSū VI 15,1); Pratīka: aśmā bhava: PārGṛSū I 16,18; ĀpMantrBr II 14,4.

43 Ed. KIRSTE: *tiladeva.*

向かって動くように，そのように，君の胎児はこちらに向かって動け，胞衣と共に這い降りよ (cf. n.38)』と［唱えながら］下向きになで下ろす。2. 生まれたら，石の上に斧を据え置き，更に上に黄金を［置き］，それらを上下逆にして，更に上に子息を支え保つ。「君は石となれ。君は斧となれ。君は打ち倒されない黄金となれ。君は『息子 putra』という名の財産なのだ。君は生きろ，百の秋を」「手足ごとに君は（胎児として）生じる。君は心臓から生まれてゆく。君は『息子』という名の Ātman なのだ。そういう者として君は生きろ，百の秋を[44]」と［唱える］。3. もし後産が落ちなければ，アンジャリ añjali[45]［にした手］によって水を汲み，この［新生児］の頭に注ぎかけるべきである。「Tiladā よ，脱落せよ。君は肉ではない，他方，塊でもではない。君は出て行け，自らの道（産道？）から」と［唱える］。

2.2.5.　前述の YV 学派の後産関連儀礼では，mantra を唱えながら産婦や新生児に水を掛け，植物を呪法の道具としていたことなどが理解される。これに対し，他学派の伝承は異なる。何れも後産には殆ど触れておらず，後産停滞への危惧を窺わせる要素や娩出された後産の取り扱いに関する詳細な言及は見られない。サーマヴェーダ Sāmaveda 学派に属するゴービラ・グリヒャスートラ Gobhila-GṛSū II 7及びドラーヒヤーヤナ・グリヒャスートラ Drāhyāyaṇa-Gṛhyasūtra II 2,29には *soṣyantīhoma*「産婦のための献供」を行うべく定められている。*soṣyantī-* の語は前述の BĀU（**2.1.**）並びに YV 学派所属の諸 GṛSū に共通して見られ（**2.2.1. − 3.**），式次第の1項目を示すキーワードの役割を果たしているものと推測される。この語はサーマヴェーダ学派の誕生儀礼において儀礼行為（ホーマ *homa-*: 祭火への供物の献供）の名称に用いられ，祭火へのバター（アージヤ ājya）の献供が行われる：

GobhGṛSū II 7,13.14[46]　*atha soṣyantīhomaḥ.* ||13|| *pratiṣṭhite vastau paristīryāgnim ājyāhutī juhoti.* − yā tiraścīty *etayarcā* vipaścit puccham abharad *iti ca.* ||14|| 13. 次

44　Sāmaveda 学派に属するジャイミニーヤ・グリヒャスートラ JaiminīyaGṛSū I 8は，新生児誕生後の Jātakarman において当該箇所とほとんど同じ mantra を唱えることを伝えている。分娩や後産を巡る儀礼については言及されていない。

45　両掌を上に向け，左右の小指を並べて差し出す。ここでは，特に手で水を掬う時の手の形を説明している。

46　Cf. DrāhyGṛSū II 2,29 (= Khādira-GṛSū II 2,29).

に「分娩直前の献供」が［行われる］。14. ［胎児が］「袋[47]」に定着したら，祭火の周りに［敷き草を］敷き広げ，バターの献供を行う，「横切って踏み入る［神格？］なるもの ... (MantrBr I 5,6 Pratīka)」[48]という，この詩節を伴って，そして「詩人の霊感に震える者は尾を保持した ...」(I 5,7 Pratīka) という［詩節を伴って］。

(15. は命名儀礼 nāmadheya)

2.2.6. Atharvaveda 学派に属するカウシカ・スートラは，植物を産婦の髪に挿す呪法が行われることを伝えている。この植物は後産分娩の後で取り外される。後産停滞に対する危惧は，Sāmaveda 学派と同様，特に言及されない：

KauśSū XXXIII 10.11.13.15 atra tava rādhyatām *ity agram avadadhāti.* |10| iha mam$_a$*-eti mūlam upayachati.* |11| ... *darbheṇa pariveṣṭya keśeṣūpacr̥tati.* |13| ... *avapanne jarāyuṇy upoddharanti.* |15| 10.「ここに君の［子孫］たちが栄えよ」(KauśSū LXXIX 18[49]) と［唱えて］(植物の) 先端を下に据える。11.「今，私の［子孫たちが栄えよ］」(ibid.) と［唱えて］根もとを添える。... 13. 頭髪に Darbha 草と寄り合わせ，結びつける。... 15. 胞衣が脱落した後で，(妻の髪に挿していた植物の根を) 取り外す。

YV 学派が他学派に比して後産分娩に関する儀礼を具体的にに述べている理由は，現段階では明らかではない。AV 学派が，元来は医学的呪法に用いる mantra を数多く伝えているにもかかわらず，実際の出産過程において当然危ぶまれるべき後産停滞への言及を欠いている点は，奇異にも思われる。各学派の誕生儀礼の詳細な検討はもとより，後の医学文献との関係についても視野に入

47 *vastí-* (AV+) は液体を入れる袋状の容器を指す語であると考えられ，特に膀胱を謂う場合がある (cf. AV I 3,6)。当該箇所においては，羊水で満たされた羊膜腔とこれを覆う卵膜とが意図されているものと推測される (→ **1.2.** 図1)。

48 *yā tiraścī nipadyase* (BĀU, ĀśvŚrSū, ŚāṅkhŚrSū, MantrBr: °*te*): ŚB XIV 9,3,3a; ĀśvŚrSū VIII 14,4a; ŚāṅkhŚrSū IV 18,1a; MantrBr I 5,6a; ĀpMantrBr II 8,5a (ĀpGr̥Sū V 12,9.10); HirGr̥Sū I 2,18a; JaimGr̥Sū I 20a; BĀU VI 3,1a. Pratīka: *yā tiraścī:* GobhGr̥Sū II 7,14; IV 6,6; KhādGr̥Sū II 2,29; JaimGr̥Sū I 20.

49 KauśSū LXXIX 18 *iha mama rādhyatām atra tava*「今，私の［子孫たちが］栄えよ，ここに君の［子孫達が栄えよ］」。XXX 10.11では，前半と後半とが入れ替えて引用されている。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) による研究成果の一部である。

れて考察する必要がある。

医学文献における後産分娩の議論は，Caraka-Saṁhitā IV 8,41.49 [Śārīrasthāna, jātisūtrīya]，Suśruta-Saṁhitā IV 15,17－20ab [Cikitsāsthāna, mūḍhagarbha（胎位異常）]，同 III 10,21 [Śārīrasthāna, garbhiṇīvyākaraṇaṃ śarīram（妊産婦の解剖学的考察）]，Aṣṭāṅga-Hṛdaya-Saṁhitā I 83－91等に見られる。これらの詳細については，紙幅の都合により別稿を期す。

Rites for delivery of a child and afterbirth in Veda

Naoko NISHIMURA

Ancient Indian medicine seems to have given a key role to magic rites originally. The Atharvaveda (ca. B.C. 1000), for example, contains many medical hymns of which purpose is a cure for fractures, hemostasis, an antidote against poison etc. Although it is not clear how medical activity was actually in those days, we might infer that medicine basically had a close relationship with magic.

We can also find Vedic hymns and rites which treat of pregnancy, birth of a child, or infertility. Investigation of them brings us an elucidation of the way how Indo-Aryans observed and understood the perinatal subjects.

This article aims for an examination of Vedic hymns and ritual for an easy delivery, focusing on afterbirth. The afterbirth delivery rite is found only in the texts of the Taittirīya School belonging to the Black Yajurveda (Āpastamba-, Bhāradvāja- and Hiraṇyakeśi-Gṛhyasūtra) and those of the White Yajurveda School (Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad, Pāraskara-GṛSū). These GṛSūs, that is, rules of Vedic domestic rites provide the ritual which prompts afterbirth to come out fast consisting of reciting mantras and pouring water over a parturient woman. The PārGṛSū calls this ritual *Avarā-avapatana* ('dropping of afterbirth'). It is a part of the rite for an easy delivery, to which the GṛSūs of the Taittirīya School give the name of *Kṣipraṃsuvana or Kṣipraprasavana* ('fast delivery [of foetus]').

The human embryo is enveloped in a bag of foetal membrane, which consists of three layers: decidua, chorion and amnion. The placenta, which is connected to the embryo with the umbilical cord, is produced between two outer membranes, namely, the decidua and chorion. When a mother excretes these foetal appendages as afterbirth, decidua exfoliates from the uterus. The delay of afterbirth delivery, called retained afterbirth, could give rise to a serious medical disorder in the mother. The foregoing materials in Veda demonstrate that the Indo-Aryan people understood the fast delivery of afterbirth brings good condition to a mother.

The problem is left unsolved why different schools from the Yajurveda do not refer to a danger of retained afterbirth. We need further probe into the whole of birth rites and the discussion in medical literature such as the Caraka- and Suśruta-Saṁhitā.